

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月3日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22510284

研究課題名（和文）高校生男女の達成意欲における分極化と教師の支援のあり方に関する研究

研究課題名（英文）Polarization of aspiration for career and educational achievement among high school students and support by teachers.

研究代表者

大竹 美登利 (OTAKE MIDORI)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：40073564

研究成果の概要（和文）：

本研究は、高校生がどのような生活意識や規範、ジェンダー意識、自己像、卒業後の進路・職業希望等の将来像、達成意欲を形成しているかについて、明らかにすることを目的としている。高校生への質問紙調査結果から、これらの点について、本人の性別だけでなく、所属する学校によって意識や考え方の違いの大きいことが明らかとなった。高校教員へのインタビューからも、学校によって進路指導におけるジェンダー認識も異なることが示された。

研究成果の概要（英文）：

This research aims to explore the everyday consciousness, social and gender norms, self-image, career expectation, and aspiration for educational and career attainment among high school students. The findings of the questionnaire survey conducted to high school students in Tokyo show that their consciousness and attitudes depend on the features of schools they attend. The interviews to high school teachers suggest that the gender-biased assumptions underlain in their career guidance to their students vary in schools as well.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,040,000	240,000	1,280,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,540,000	990,000	4,530,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー（教育・発達）

キーワード：高校生、達成意欲、ジェンダー、男女、分極化

## 1. 研究開始当初の背景

1970年代、80年代からの実践や学校内の教育課程などの研究を受けて、1990年代以降、ジェンダーを生み出す「隠れたカリキュラム」についての実証的な研究成果が蓄積され

てきた。国際的には、教育達成にみる男女格差はめざましく縮小しており、ジェンダー問題に加えて人種や階層などによる複合的な問題に関心が移りつつある。そのなかで、男子の学力低下や意欲低下が指摘され、ジェン

ダー問題が女子の問題ではなく男子の問題でもあることに焦点があたり、あらたな取り組みが模索されている。

日本国内では、「性別カテゴリーに関するエスノグラフィックな研究」(宮崎あゆみ『学校における「性役割の社会化」再考』1991)のほか、根本橋夫(調査時1985年)、笹原恵(同1994年)、木村涼子(同1995年)らの調査研究によって、女子問題からのジェンダー課題が明らかにされてきている。また、近年では、佐藤和夫ら(科研)によって高校生を対象としたジェンダー意識の大規模調査が行われ、男子問題にも焦点があてられつつある。しかしながら、ジェンダーに関わる社会環境や意識の変化が激しいなかであって、日本国内における研究蓄積はいまだ不十分である。また、生徒と教師(学校文化を含む)双方の状況を対象とし、教師教育(教員養成や教員研修など)のあり方までを追究する研究は少ない。

筆者らはこれまで、「ジェンダーの視点からの教員養成・再教育プログラムに関する研究」(科学研究費補助金:基盤研究(C)平成14~16年度)、「教員養成系大学教員のジェンダーに関する取り組みの実態」(平成14年度東京学芸大学重点研究費)によって、教員養成系大学の教員および学生のジェンダー意識やそれに関わる教育活動・学習活動や規範を調査し、教員および学生のジェンダー意識と権威主義的な教育観との相関関係を明らかにした。

さらに、「学校教育におけるジェンダー平等戦略—教育環境と教育内容に焦点を当てて—」(平成17~18年度福島県男女共生センター公募研究)で、小学校と中学校の教員と児童・生徒を対象に、ジェンダー意識や規範意識、生活行動を調査し、①中学校男性教員のジェンダーバイアス及び同性である男子生徒との親密性による女子生徒の間接的な排除、②教員に根強い男女特性観、③女子のリーダーシップなどのジェンダー形成における変化、④からかいによる男子生徒の序列関係形成、⑤教員と児童・生徒間の相互の関係性に対する認識ギャップ、⑥男子の達成意欲の減退、などを明らかにした。

以上の研究成果と国内外の研究動向をふまえて、進路が分岐しジェンダー問題が明示化される高校段階に焦点を当て、高校生のジェンダー形成環境や、それへの学校文化や教師の関わりなどの研究分析をもとに、男女共同参画を推進する教師教育の実践的な課題を明らかにすることが緊要との着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、高等学校における教師と生徒の両者を対象に、質問紙による定量的調

査とインタビューによる定性的調査を行って、高校生のジェンダー意識・達成意欲・職業希望のジェンダー間・ジェンダー内の分極化について明らかにするとともに、それらに対する学校文化の関わりや教師の対応状況を明らかにすることによって、教育実践の改善方策と教員養成の課題について検討することにある。

## 3. 研究の方法

高校生を対象とする質問紙調査による研究を主たる課題とした。①ジェンダー意識・規範をはじめとして、これらに関する②教師と生徒の関わり、③教師文化、④家庭環境と教育達成との関係、⑤青年期の自己像や達成意欲、自己肯定感、⑥青年期の進路・職業選択、および学校における進路指導、等について先行研究を整理した上で、質問項目を検討し、調査票を作成した。

質問紙作成にあたっては、先行研究の検討を行った上、高校教員へのインタビューを実施し、さらに高校案内を取り寄せて教育目標等を参考にした。

具体的には、H22年度に、都立高校において高校教員に対して、進路指導のあり方、生徒指導、生徒のジェンダー等についてインタビューを実施した。また、学校案内および学校経営シートからクラスター分析を行い、学校タイプを類型化した。H23年度には、東京都進路指導教師会事務局長に東京都立高校の進路指導体制についてインタビューを実施した。

H24年度に東京都内の多様な学力水準の高校10校を対象として質問紙調査を実施した。

## 4. 研究成果

まず、3年度の研究機関を通じて、高校生を対象とする質問紙調査を実施し、その結果を分析し報告書にまとめ公表した。

本調査では、東京都内の多様な学力水準の高校10校を対象としているが、これらを附属校、進学重点校、中堅校、進路多様校、チャレンジ校の5タイプに分類した。分析は、性別および学校タイプ別のクロス集計を中心として行った。

質問紙調査によって得られた結果は次のとおりである。

### (1) クラスの様子について

クラスの様子に対する認識は、全般的に男女どちらかに特に当てはまる、とは考えていないものの、男女別に、学校タイプによって違いがある。例えば、「附属校」では、女子の方が「授業でよく発言する」が、「意見が通る」のは男子の方、と思う傾向がある。「進学重点校」は、これとは逆の傾向にある。

## (2) クラスでの自分の様子について

クラスや学校での自身の様子もまた、男女別に、学校タイプによって違いがある。「附属校」「進学重点校」は、その学校の生徒であることを特に誇りに思っている。「中堅校」は、宿題や提出物などへの取組みに対する自己認識が高い。「チャレンジ校」も同様であるが、一方で、学校生活に充実や楽しさを最も感じていない。「進路多様校」は、その学校の生徒であることを最も誇りに思っておらず、他の学校に転校したいと思う割合も最も高い。

## (3) 教師-生徒関係

教師と生徒の関係について分析した結果、女子のほうが教師との良好な関係を築けていないと感じていた。また生徒への接し方は、男女で違いを感じないが、教師自身の男女観には区別があると感じていた。

進路指導では男子のほうが「やりたいこと」「勉強するように」「もっといい企業を選ぶように」言われていることが分かった。この傾向はどの学校タイプでもみられた。

学校タイプ別分析では、中堅校の高校生では教師に対して否定的な評価をしており、進路多様校やチャレンジ校では比較的良好な関係が形成されているようであった。また具体的な行動ではなく、気持ちを理解するなど、信頼関係を必要とすることはどの学校タイプでも女子のほうが否定的であった。

## (4) 交友関係および将来像について

2割強の男子生徒は、親しい友だちがいない。ただし、親しい友だちがいるなら女子生徒よりも1名ほど多めにいる。また仲間はずれにされないように気を遣っているのは男子生徒の方が多く、友だちが自分の気持ちをわかってくれていると感じているのは女子生徒の方が多い。恋人ならびに異性の友人については、女子生徒の方が「いる」と答えている。

自分の将来像については「有名な大学に入りたい」「有名な会社に入りたい」「有名になりたい」「えらくなりたい」「お金持ちになりたい」のは男子生徒の方が多く、女子生徒が肯定しているのは「人の役に立つ仕事」「好きなことをいかした仕事したい」「安定した生活を送りたい」であった。

## (5) 自己像

高校生の自己像としてたずねた諸質問を因子分析の結果より、自己受容、効力感、適応感、成績という4点にわけて分析した。自己受容としての6質問中4問において、男女差が見られ、そのいずれでも男子が高かったが、「自分にはよいところがたくさんある」「欠点があっても自分のことが好きだ」とい

った自己受容は全体的に低かった。

効力感のうち、「将来の夢や目標がある」のは男子より女子であり、「冒険にあこがれる」のは女子より男子である。

「友だちと一緒にいると楽しい」「学校生活が楽しい」といった適応感は、男女で優位性が見られる項目もあるが、全体として両項であった。

成績については、男女とも7割近くは満足していなかった。

## (6) 高校生の進路意識

高校生の進路意識は、全体としては進学希望が8割ほど多く、そのなかでも四年制進学希望が4分の3を占めた。女子の場合も四年制大学希望者が過半数ではあるものの、男子よりは20%近く低く、専門学校希望、短大希望の比率が男子より多かった。男子では女子より「(高校卒業後)正社員への就職」希望比率が高い。

高校の学校タイプ別にも有意差が見られ、付属校、進学重点校はほとんどが4年制大学への希望だが中堅校、進路多様校、チャレンジ校の順で低くなり、チャレンジ校では50%余りしかない。その分、進路多様校やチャレンジ校では「正社員として働きたい」が高率で、チャレンジ校では3割に及んだ。

## (7) 女らしさ・男らしさ

### ① 自己認識と期待

男子は82%が自分自身のことを男らしいと思っているのに対して、女子で自分のことを女らしいと思っている者は58%と男子に比べて少なくなっている。また、自分は男/女らしくありたいかというジェンダー規範への同調性に関する質問に対しては、男子の88%、女子の77%が肯定的である。恋人に対する男/女らしくあってほしいという期待については、男子の70%が肯定的であるのに対して、女子では81%と男子より高くなっている。

男性が持っていることが望ましいと思う性質について選んでもらう設問では、選択率の上位4つは「思いやりがある」「行動力がある」「気配りができる」「スポーツが得意」となった。女性に関しては、「思いやりがある」「気配りができる」「料理が得意」「人の和を大切にする」である。「思いやりがある」「気配りができる」といった対人関係調整能力が脱ジェンダー化している。

### ② 男だからといわれるか、女だからと言われることを不快に感じるか

言われたことがない生徒が全体としては半数を占めており、通常はあまり言われていないが、「ときどき言われる」「いつも言われる」を合わせると女子では6割弱と、女子の

方が「らしさ」を求められていた。またそう言われることに不快を感じるかは、高校タイプ別にみると、「そう言われる」尺度が低い高校の方が「不快を感じる」尺度は高く、逆相関となっていた。

### ③性役割分業意識

女性が職業を持つことについて〈継続型〉〈一時中断型〉〈出産退職型〉〈結婚退職型〉〈未収色型〉の中から選択してもらったところ、全体として最も多いのは〈一時中断型〉であるが、〈継続型〉は女子に多かった。現在している家の仕事についても性差が表れており、男子が多く行っている仕事は「風呂掃除」「ごみ出し」、女子が多く行っている仕事は「食器洗い」「洗濯」であった。

### ④ジェンダー意識

高校生のジェンダー意識としては、「愛する人と結ばれることは人生でもっとも重要だ」といったロマンティックラブイデオロギーが強いこと、性別役割分業観のなかでも女性ケア役割・男性稼ぎ手役割への支持が圧倒的であった（「女性は働いていても、家事・育児のほうを大切にすべきだ」「男性は家族を養うのに十分な収入がなければ、一人前とは言えない」）。また、男性へのジェンダー期待が根強かった。性別では、おおよそ、自分が属する性別に対するジェンダー規範についてより強く同意する傾向がみとめられた。学校タイプでは、全体的には進学校より中堅校、進学多様校の方がジェンダーバイアスの強い傾向がみられるものの、男性に対するジェンダー期待や男らしさに関する規範については、学校タイプによる差は明確ではなかった。

### (8)高校生の生活と家庭環境

高校生の勉強時間や成績については、性別による差はほとんどみられなかった。

学校外の活動については、学校タイプによる差も大きく、「塾」は上位校や附属校での参加率が高く、「アルバイト」は中堅校や進路多様校での参加率が高い傾向がみられた。このうち「塾」は学校内での男女差がみられないが、「アルバイト」については特に中堅校や進路多様校では女子の参加率が大変高くなっていた。このことから、アカデミックな面では男女差がみられないが、それ以外の面での男女差が残っていると考えることができよう。

また、家庭におけるしつけ経験では、学校差はあるものの、全体として、勉強については、男子が注意されており、家庭では男子に対して学業面での期待が大きいと考えられる。また、女子に対しては対人的な能力や整理といった能力への期待が高くなっていた。

一方、高校教員へのインタビュー調査については、進路指導担当教員（3年生担任）を対象として実施した。その結果、4年生大学への進学者の多少によって、進路指導・生徒指導のあり方、生徒のジェンダー認識等には相違が見られた。すなわち、進学校では、生徒の側も教師の側も、進路に対する意識や将来設計にジェンダー差がないと受け止められており、ジェンダーを意識した生徒指導を行っていないと語られた。進学校でない学校では、生徒の性別役割分担意識や将来設計、進路にジェンダー差があり、そうした生徒の実態に合わせる中で、ジェンダーで区分した指導になっていることが確認された。

また、都立高校が作成・公表している『学校経営シート（平成22年度）』に記載されている「数値目標」の内容に基づいて、都立高校の類型化を行った。各校で最大3個設定されている「数値目標」の記述内容をKJ法に準じた方法で概念化・集約化し、20種類の概念を得た上で、それらの項目についての記載の有無で各高校の数値目標の内容をコード化し、そのデータに対してWard法によるクラスター分析を適用した。分析の結果、都立高校は大きく分けて5つに分類することができ、それぞれのグループは、「進学準備」（49校）、「居心地重視」（54校）、「脱落させない」（63校）、「部活と進学」（21校）、「資格と就職」（53校）と名付けることができる特徴を持っていた。

この5類型を、学校の学力水準等と合わせて、質問紙調査における学校タイプ分類への参考としている。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計 1 件）

大竹美登利ほか著『高校生男女の達成意欲に於ける分極化と教師の支援のあり方に関する研究報告書』2013年、120

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

大竹 美登利 (OTAKE MIDORI)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：40073564

#### (2) 連携研究者

直井 道子 (NAOI MICHIKO)  
桜美林大学・大学院老年学研究所・客員教授  
研究者番号：10073024

高橋 道子 (TAKAHASHI MICHIKO)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：70107712

松川 誠一 (MATSUKAWA SEIICHI)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：20296239

中澤 智恵 (NAKAZAWA CHIE)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：00272625

苫米地 伸 (TOMABECHI SHIN)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80466911

眞鍋 倫子 (MANABE RINKO)  
中央大学・文学部・教授  
研究者番号：00345323

木村 育恵 (KIMURA IKUE)  
北海道教育大学・教育学部・講師  
研究者番号：50447504